

最後に指摘したいのは、「終章に代えて」で展開された雲南省ハニ族の棚田稲作とアパタニの稲作の比較から推論された東ヒマラヤの地域形成に関する編者の新たな仮説への疑問である。よく似た稲作技術があるからといって、それを関連付けるためには注意とそれなりの手続きが必要であろう。プラマプトラ川の平野部にはタイ系のアホムが古くから居住しており、彼らとの交流も考える必要がある。

分担執筆者の一人である竹田晋也が、地球研プロジェクトの報告書（脚注に記載の報告書 p. 215）で、「オアシスのチベット」「草原のチベット」「森のチベット」に3区分されるチベットを、①進化の時間、②文化の時間、③経済の時間、換言すればそれぞれ自然史、生態史、経済史の時間スケールで考える必要性を記している。それに倣えば、②と③の時間スケールを設定したうえで、あらためて東ヒマラヤの地域形成をまとめる「終章」が必要ではなかったかと悔やまれる。同じく竹田は、本書のコラム1（初出は、『ヒマラヤ学誌』8号、2007年）でプロジェクトが取り組むべき今後の研究課題を列記している（pp. 118-120）。いずれも②と③の時間スケールにそった環境史や土地利用史に関する課題である。共同調査のごく初期に掲げられたこの課題に沿って調査が組織され継続されていれば、ずいぶんと内容が違った「終章に代えて」が登場していたのではなかろうか。

いくつか疑問を呈したが、まだ知られていないことがいっぱいあるのが東ヒマラヤである。そして、インド、チベット、東南アジア、中国の文明と文化そして政治が交錯する複雑な地政学的位置ゆえに、これからも大きく変化していく地域でもある。編著者がさらに調査を続け、遠くない未来に本書の続編が出るのを期待したい。

（田中耕司・京都大学名誉教授）

佐久間香子、『ボルネオ 森と人の関係誌』
春風社、2020、352+xxxivp.

ボルネオ島のマレーシア・サラワク州のある在地民コミュニティの過去と現在を連続性と断絶の

両面から描こうとした野心作である。

まずは読みやすい文章であることに感心した。情景描写なども通常の日本人による、とりわけ博士論文公刊としての民族誌のレベルを超えていて、変な言い方だがアメリカ人の書く民族誌のような印象を受けた。専門研究者のみならず幅広い読者を想定して、現地状況の背景的説明を多く付している点も、そうした印象に寄与している。

ボルネオと大きく唱ってはいるが、本書で記述と分析の対象となっているのは、その北西部のサラワク、しかもその北部、バラム川中上流域である。この地に住む人びとを著者は「森の民」という言葉で言い表す。森が狩猟採集の場であり焼畑耕作のための土地を提供するという意味で人びとのサブシステンス（自給活動）の日常的な源であると同時に、彼らの経済と政治をよりダイナミックに展開させてきた交易活動のための財の産出現場でもあるからだ。彼らのことをまた「プナン人の『隣人』であり、……プナン人の『影』となった」（p. 71）と表現しているが、これは今日の社会状況を簡潔に表す的確な比喩となっている。

本書はていねいに書かれた良質の「歴史」民族誌であり、サラワクの社会、政治、歴史的な背景を幅広く説明している点で、親切さの目立つ本となっている。1841年から実質100年にわたって現在のサラワク州にあたる領域を統治したブルック国家についての説明は、一般読者に有益であろう。ブルネイ後背地としての対象地域社会の19世紀をとおしての政治的、経済的位置づけの記述は、その多くをP・メトカーフの著作〔Metcalf 2010〕に負っているが、その良い要約にもなっていて、探索の導きの糸として理にかなった役割を果たしている。ここでの「森」と「人」は、評者が慣れ親しんだサラワク南部の森と、それに関わる人間活動とは大きく異なるところがある〔内堀 1996〕。その相違のためであって、評者にとってこの書評書きは存外の楽しみとなった。

全体構成は序章と終章を含む全11章からなり、番号のついた9つの章は2部仕立てになっている。「森の総合商社——交易拠点としてのロングハウス・コミュニティの形成」と題する第I部（1章か

ら5章)はサラワク北部という地域社会の歴史的特性に関する考察とその部分的再構成の試みである。「拡大するロングハウス・コミュニティ、縮小する社会空間」と題する第Ⅱ部(6章から9章)は現在の住民の生活様態の記述と分析だが、包括的な生活誌というよりも、さまざまな社会問題として現われる事象を軸として論争的な議論が進められる。以下、各章の題とそこでの中心的命題のみを追うことにする。

序章「森と人が織りなす時空間へ」では、ロングハウスという居住形態とその社会的特質に関し、これが特定のエスニシティや「集団」に「安易にまとめることができない」ものと論じ、その転変を追う「歴史人類学」の必要性を主張する。第Ⅰ部の第1章「海洋交易を支えた森林資源」は東南アジア島嶼部における交易圏および港市国家の意義を概述し、ブルックのサラワク国家も森林資源の輸出から利得を追求する交易国家の枠内にあったと指摘する。第2章「起源・移動・戦闘」では、バラム川中上流域一帯の複数の言語集団のボルネオ中央高地からの移動を神話・伝承でたどり、農地と林産物の獲得を移動の主要因と見た上で、交易と政治的威信の中心としてのブルネイの枢要性と、19世紀中葉のカヤン人の移住にともなう戦乱が今日の住民集団の編成に与えた決定的な影響を論じる。第3章「後背地の交易拠点」は、著者がフィールドワークを行なったブラワンと称される人々とそのロングハウス・コミュニティの歴史的形成過程を追う。第Ⅰ部の中核的な章であり、当該のコミュニティが林産物、とくにツバメの巣をブルネイへ運出する際の拠点として形成発展したことを論証し、研究蓄積のある海洋交易の奥にある内陸交易の重要性を説く。第4章「『流域社会』という森の社会空間」では、河川流域という広がりの中での当該のハイブリッド的コミュニティ内外の社会関係を、中核(「根幹」)の民という地位を主張し確保する階層と首長の政体の生成、華人商人との交渉関係、狩猟採集民との交流関係を軸に論じる。第5章は第Ⅰ部のまとめである。

第Ⅱ部の現代編に入って第6章「ロングハウスの空間、国家の空間」では、第二次大戦後の英国直轄植民地期からマレーシアの一州としての独立

後の大きな政治枠組の中で展開した民族カテゴリーの再編成——オラン・ウル「上流部の人びと」の創出——、ロングハウスが面する川の最上流部の森林国立公園化計画等による木材伐採や「ツバメの巣」採集などの生計活動に対する規制の強化、こうした変化に対応する住民社会内部の政治過程が描かれる。第7章「国立公園と生きる」では、村からの出稼ぎや人工のツバメ家屋を使ったツバメの巣ビジネスの新展開といった現金収入活動と、ロングハウスと上流部の国立公園に隣接して叢生した個別居住群からなる「ムル村」の2カ所にまたがって生活する生計戦略を描き、引き続いて第8章「森で食べる、森を食べる」では国立公園とその周辺における観光業と食糧獲得、村と都市間の獣肉贈与の社会関係、狩猟採集活動者としてのプナン人との関係等、現在のブラワン人住民の日常的な生活実践に見る活力とそこに潜む葛藤に筆を進めている。第9章「先住民運動の光と影」は、サラワク州北部における政治的葛藤の極端的な現われともいえる狩猟採集のプナン人を旗印とする「先住民」運動をめぐる州内外の言説と活動力学の解明に向けられており、これまでの諸章とは趣を異にする論述となっている。こうした運動が下火になった観のある今日、運動側にいた人類学者に対して、その運動がもたらした在地民の生活への影響についての総括を問いかけている。終章「森と人がつくるロングハウス」は、内陸交易に着目した歴史人類学の意義をあらためて主張し、研究対象としたコミュニティの生成には「民族」に固着した目ではなく、広範囲の財と人が寄り集まる「総合商社の政体」として見る目が必要であることを力説する。

ボルネオのこの地域に関して著者が主張する「歴史人類学」の成果は2つの命題に帰着する。(1)森林資源の利用にはサブシステムと交易の2面があり、これは過去から現在に継続している。(2)人びとの集まり方は民族という観点で語ることはできず、混淆的な形成による集合態と考えるべきである。この2命題に導く因子としての具体的かつ偶有的な事実細目は、この地域が地理的な意味でブルネイの後背地にあたっていたこと、そのこ

とが経済的、政治的にブルネイに依存する、また部分的には相互依存する社会関係を内部的にも生成させたことであり、その依存を可能にさせた物質基盤が何にもましてツバメの巣だったということである。

本当のところ、民族誌の研究を上のように纏めてしまっては身も蓋もなく、評価はそれぞれの細目の事実性とその間の論理関係の成否を認めるか否かだけになってしまう。結論だけを言えば、評者としては著者の主張をおおむね認めるが、個々の細目の真実らしさを担保するのは民族誌の細部に込められた事実記載の正確さと、それについての解釈を導く論理の妥当性なので、以下本書のいくぶん細かい所に関わる事実と解釈について確認したい。

まずは評者が「この地域に関して」と限定句をほどこした点である。この限定句があるかぎり、上記(1)と(2)の命題に疑義をはさむ余地はない。著者もそのことは十分に認識しているように書かれてはいる(「多様性」への言及)が、時折、内陸交易に関しても集住共同体の形成に関しても、ここで得られた知見がサラワク州あるいはボルネオ島全体はおろか、東南アジア島嶼部のあらゆるところに当てはまるかのような論調になることがある。限定された地域の事象がより普遍的なものとして、他の地域についても新たな視点を提供するというだけならば、それは当然とも言いえるが、単に可能な視点ではなく、あらゆる地域の実態がそのようであると主張しているように思わせてしまうのは、あやうい筆致と言うべきであろう(p. 178f.)。

あやうい筆致、あやうい論理をすべりこませてしまうのは、おそらく著者の企図する歴史と人類学の「障壁」の乗り越えという点にある。著者は人類学研究において「歴史」を単に背景にとどめず、人類学者が目にする現在を解明するものとして扱うべきものとする(p. 44)。先行する過去をもって後代を説明するのは歴史家の目であり、それ自体は否定されるものでももちろんないが、歴史研究による説明は基本的に個別的、偶発的な状況と出来事を基礎とするものであり、ここから普遍への転換論理は内生的には生じない。後者の転

換を追求するのは人類学の論理であり、そのためには人類学的な抽象への飛翔が必要とされるのである。本書は過去による現在の説明という通時の企図には成功している。だがこれを空間的地理的に拡張するとき、抽象性を媒介せずに、具体のままを適用するという勇み足を踏んでいるようにみえる。

人類学における対象社会の歴史性への関心はポストコロニアルの転回の一環として今もって隆盛しているが、本書に見られる先行研究回顧の際の批判的筆致にはこの大きな波に乗った威勢の良さがある。肝心の森と人との関係に関して、著者は第Ⅰ部の随所でこれまでのサブシステム中心的な見方をひっくり返そうと奮闘しているが、成功した部分はこれまでに何度も指摘されてきたことであり、どうしても今さら感が残る。物足りない部分は、第Ⅱ部で著者の言う「現代的な複合生業形態」の下で今を生きる人びとの日常の姿が存分には描かれていない点にある。歴史を背景にとどめないという意味では第Ⅰ部(過去)と第Ⅱ部(現在)の接続は著者の野心的な企図にあっているが、かえってそれが民族誌の歴史への回収、あるいは歴史性そのものの価値化に傾いているという印象を与えることになってしまっている。

個別の論点に二三触れておく。

「ロングハウス・コミュニティ」という用語をメトカーフにならってその混淆的形成を指すものとして使いたいと著者は言う(p. 71)。ロングハウスに集住する人びとのコミュニティを単一民族からなるもののように語りたくない気持ちというその意図は理解できる。だがこの用語はフリーマン以来「サラワク人類学」で長く使われてきたものであり、この語句だけで存在様態について特別の含蓄を含ませるのは、研究史的にも語義的にも無理がある。なんらかの概念的限定形容句の付加によって表現するほうが良い。

著者はまた、このコミュニティの前身で1870年代に起きた、当時の状況について「重要な情報」を伝える事件として、サラワク官報等の史料からメトカーフがまとめたブルネイ商人殺人事件の顛末を紹介しているが、この紹介はいくつかの点で不正確である。たとえば、著者はそこからこのロン

ゲハウスに「大量の火器（火縄銃）が備蓄されて」（p. 164）いたと読み解くのだが、評者にはどうしてもそうは読めない。言及されている火器は回転台座のある黄銅砲であり、殺人の代償の額は「砲」という言及はあるものの、カティ（kati）で表わされたその重量は真鍮（黄銅）製品全体の重さを示すものであって、火器そのものの重量ではない。この読み間違いは、著者がこの地域の過去のイメージを交易財の量的豊富さで示そうとしているだけに、残念な瑕疵である。

最後になるが、サラワクといえは避けては通れない「先住民」の位置づけに関して、連邦としてのマレーシアとサラワク州という重層統治構造の意味を著者がきわめて正当に指摘していることを高く評価しておきたい。

（内堀基光・一橋大学／放送大学名誉教授）

参考文献

Metcalfe, Peter. 2010. *The Life of the Longhouse: An Archaeology of Ethnicity*. Cambridge: Cambridge University Press.

内堀基光. 1996. 『森の食べ方』東京：東京大学出版会.

谷口美代子. 『平和構築を支援する——ミンダナオ紛争と和平への道』名古屋大学出版会, 2020, viii+381p.

フィリピン南部のミンダナオ紛争は、アジアにおける長期の国内紛争として知られる。1960年代後半から反政府武装勢力「モロ民族解放戦線」（MNLF）の活動が拡大し、1996年に和平合意が締結されたものの、それ以降はMNLFから分派した「モロ・イスラーム解放戦線」（MILF）との紛争が激化した。しかし、近年に至り、MILFとの和平プロセスが進展を見せている。2014年に包括的和平合意が締結され、2019年にはMILF主導の「バンサモロ暫定自治政府」が設立された。本書は、複雑なミンダナオ紛争に正面から向き合った力作である。歴史的分析に基づいて、紛争と平和がどのような現地社会アクターの関係の上に成立したか

を明らかにし、それに基づいて外部者による支援のあり方を提言している。

評者はアフリカ政治を専門としており、専らアフリカを対象に紛争と平和の問題について考えてきた。本書の出版を新聞広告で知った時、自分の専門地域とは異なるがいずれ読んでみたいと思った。その後、本誌編集部から書評の打診を受け、迷った末に引き受けることにした。自分はフィリピン地域研究に関して全くの素人だが、異なる地域を対象に類似した関心を持ってきた者として、何かしら感じるところがあるだろうと考えたからである。以下では、まず全体の構成と議論の内容を要約したうえで、コメントを述べることにする。

本書の構成と内容

本書は、序章、中核をなす第1～第5章、そして終章から構成される。序章では、先行研究が批判的に検討される。平和構築論の主流をなすリベラル平和構築論に対して、それが外部主導の普遍主義に基づく制度構築になりがちで、現地社会の動態に目を向けないことを批判する。一方で、従来のミンダナオ紛争研究に対しては、政府とイスラーム系反政府武装勢力との二者間紛争だけに注目し、それらと地域社会に根差した有力クランとの関係性が十分に論じられてこなかったと指摘する。二者間ではなく、有力クランを加えた三者間の相互依存的な関係性の中で、ミンダナオの紛争と平和の構造を捉える必要があるという本書の視角が示される。

第1章から第3章は、ミンダナオ紛争の詳細な通時的分析に割かれる。第1章は、海域イスラーム諸王国の形成から米国統治下の社会変容を扱う。辺境として植民地フィリピンに組み込まれたイスラーム社会は、米国統治下においてキリスト教徒とは別の制度枠組みで統治され、クラン指導者が植民地政府に取り込まれる形で国家に統合された。国家とクランは今日においても個人的な関係に立脚したハブ・スポーク関係を取り結んでいるが、その原型が植民地期に形成されたことがわかる。第2章では、独立後のフィリピンでイスラーム系反政府武装勢力MNLFが興隆し、アキノ政権期以降の和平交渉によって自治政府「ムスリム・ミン